

主 題：揺るがされぬ生涯をおくるために6

聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章8節

全く予測することができない私たちの生涯に起こる様々な事柄、そのようなことを考えると、私たちはもしかすると、不安のない平安に満ちた生涯を過ごすことは不可能かもしれないと考えることがあるかもしれません。私たちの周りには、数限りない私たちの心を苛む事柄があります。それらによって私たちは不安に思い、心配し、苛立ちを覚え、時には憤りに心がいっぱいになって生きることがあります。けれども、私たちがこれまで学んできたように、聖書は私たちにはっきりと命じています。「思い煩ってはいけない」と。それだけでなく、私たちが神から平安が与えられるという約束を受けていることを教えているのです。この平安に満ちた生涯を私たちが送るために、みことばは私たちにくつかなことを求めています。そこには私たちが持っていなければいけない必要条件というものがあることを見えてきました。

☆平安に満ちた生涯を送るための必要条件とは、

1. 私たちが聖書的喜びをもつこと。この聖書的喜びとはどのようなものだったでしょう？それを定義するとこのようなものでした。それは私たちの内側にある深い確信であると。どのような確信でしょう？それは神が私たちクリスチャンの最善のために、また、ご自信の栄光のために、私たちの周りに起こるあらゆることを支配しておられ、それを知っているゆえに、すべてのことはどのような状況の中にあっても万全であるのだという確信でした。それが私たちに聖書的な喜びをもたらしたのです。何一つ私たちの神が知らずに起こることはなかったのです。何一つ私たちの神が計画せずには起こることはなかったのです。何一つ私たちの神がご自身の栄光のために、また、私たちの最善のためになさらないことはなかったのです。そのことを私たちは深く確信しているゆえに、どのような状況が襲ってきても私たちは言えたのです、「大丈夫！すべては万全だ」と、そして、私たちのうちには喜びがあったのです。

2. 寛容な心をもっていること。この寛容な心というのは、単に、私たちの生涯に困難をもたらす状況や人々をじっと我慢して堪えるということだけではありません。そのような困難をもたらす人々に対して私たちが愛の行為を実践して行くことです。パウロが私たちに命じたのは、その寛容な心をすべての人に知らせることでした。どのようにして心知らせるのでしょうか？それは私たちがその人たちに対して愛の行為を実践して行くことによって、初めて目に見えるものとなっていったのです。このように、私たちが様々な状況の中で、人間関係において、争いを起こすのではなくて平和を作り出す者となることでした。私たちがそれを行なっていくとき、私たちの心には平安がやって来ると教えられました。

3. 人生に起こる様々な事柄に正しく対応すること。私たちは私たちの心を二つに分けてしまう不必要な、不適當な心配をするべきではなかったのです。いろいろなことが起こったとき、そこにしか目が向かなくなってしまうと、私たちの心が思い煩いや心配や不安や悲しみや恐れに満ちるのではなく、その問題によって生じる様々な必要を感謝の態度をもって神に願い求めて行きなさいと、パウロはそのように教えたのです。

神の計画が完全であることを知っているゆえに、神が良い方であり、知恵に満ち、完全な力をもって支配されているということを私たちが信頼しているゆえに、問題の中にあっても、困難の中にあっても、私たちはこの神の前に感謝しつつ祈ることができるのです。そして、私たちがそれをするとき、問題から目をそらして神の方を向いて進んで行くことができる、そこに平安があることをパウロは教えたのです。神はそれを約束してくださっていると。この平安というのはそのときに作り出されるものではありませんでした。それは、私たちにもうすでに与えられていたのです。私たちが神との和解を得たときに、私たちは神との間に平安が与えられ備えられ、そして、それを豊かに持つことができるとパウロは教えたのです。前回このことを話しましたが、その最後に皆さんに二つの質問をしました。一つは、あなたは神を十分に信頼しているゆえに、その生涯に起こるあらゆる事柄が、神があなたに求めている目的を達成するために必要なことであり、それを通して私はキリストに似た者になることができるということ。を心から確信していますか？ということ。もう一つの質問は、あなたはパウロがそうでありたいと願ったように、神の目的が自分の生涯に達成されることを願っていますか？でした。このピリピ書の文脈を見たとき、3章でパウロがこの地上の生涯でもっていたあらゆる誇り、価値があると考えていたあらゆることすべてが、ちりあくたであると思ったことを教えていました。3：8「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。**」と、なぜこんなことを思ったのでしょ

う？それは、彼には新しい正しい目的が与えられたことに気付いたからです。それはいったい何だったのでしょ？パウロは続いて11節までに私たちに教えてくれています。「それは、私には、キリストを得、また、：9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。：10 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、：11 どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」と、私はキリストと同じようになりたいと言っています。それを他の何よりも強く求めていたゆえに、パウロは言いました。私はこれまで価値があると思っていたものを全部捨てます、それはごみと同じだ、私が一心に求めることは神の目的が私の生涯に行なわれることだと。皆さんはパウロと同じようにそのように思っておられますか？

今日と次回、私たちが必要な条件を兼ね備えて、そして、神からの約束である平安を実際に経験し、それが継続的に私たちの生涯に現われることができるために、何をしなければいけないのかということを選んでいきます。私たちは最初に必要条件を見ました。二番目に神の約束を見ました。そして、今回見ることは、平安に満ちた生涯を送るための実践です。また、そのための鍛錬と言ってもいいでしょう、どのようにすればそれができるのか、一時的ではなく継続的に、ずっとこれから私たちが主によって召されるその日まで、キリストが与えてくださるこの平安を心に満ち溢れさせて生きて行くために、私たちは何をしなければいけないのでしょうか？ごいっしょにそのことを考えて行きたいと思います。願わくば、私たちがパウロのことばに注意深く耳を傾け、そこから学んで行く、それによって、私たち一人ひとりがどのような状況の中にあっても、神がもうすでに与えてくださっている平安を失うことなく、この人生を過ごして行くことです。

パウロはこのように言います。8節から「最後に、兄弟たち。すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われ、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。：9 あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。」、パウロは「最後に、」ということばを使って、非常に重要なセクションをまとめて行こうとしています。ここでパウロはこの手紙に出てくる最後の二つの命令をしています。それは、私たちがどのように平安に満ちた生涯を送ることができるのか、そして、それを継続的に持つて行くために必要な事柄を教える、そのような命令です。一つは、私たちが何を考えるのかということに関する命令です。もう一つは、私たちがどのような行動をとるべきなのかという命令です。今日は、最初の部分、何を考えなければいけないのかということを選んでいきましょう。

☆平安に満ちた生涯の実践のために

1. 私たちの考え、思い、何を考えるのか

パウロは私たちが喜びをもって、平安に満ちた状態で生きて行くために何をしなければいけないのか、「考えなさい」と命じました。パウロは、私たちがもし正しい考えをもって生きるなら平安に満ちた生涯を送ることができると言います。つまり、正しい考え方は平安に満ちた生涯を送るためのカギなのです。ある格言があります。「私たちが考えを蒔くとそこには行動が刈り取られ、私たちが行動を蒔くとそこからは習慣が刈り取られる。私たちが習慣を蒔くとそこには特徴が刈り取られ、私たちが特徴を蒔くと、そこからは運命が刈り取られる。」と。私たちが何を考えるかというのが蒔かれると、その蒔かれた種から実がなって収穫のときに刈り取るのは行動だと、行動を蒔き続けるとそこから刈り取るのは私たちの癖、習慣、その習慣が蒔き続けられるとそこからは私たちがどのような人間かという特徴が刈り取られ、その特徴が継続的に蒔かれると私たちがどのように生きて行くのかという、その人生の定めというのが起こると、こういうことです。考えから始まって行ったのです。皆さんが今思っておられる以上に、私たちが戦わなければならない戦場というのは、私たちの思いです。私たちの考え方、または、私たちの心といってもいいかもしれません。私たちはそこで霊的な戦いを繰り広げなければいけないのです。神の前に正しく生きるために何を考えなければいけないのか、それは、私たちが神に喜ばれる生涯を送るために必要な戦いなのです。それゆえに、パウロが私たちに教えることは、正しい考え方をしなさいということです。初めに見ることは、私たちが平和に満ちた生涯を送るために何をしなければいけないのかということ、パウロは「考えなさい」と言いました。パウロのことばは8節の最後、「そのようなことに心を留めなさい。」です。私たちが問題にぶつかる時、私たちの中で最初に回答を出そうとするのは感情です。感情が一番最初に答えるのです。こう感じる、こう思うと。怒りっぽい人は物事をよく考える前に怒りという感情によって対応します。子どもを相手に何か質問するとき、このことをどう思いますか？答えてください、だれかわかる人はいますか？というとき、子どもたちはときに皆ハイハイと手を上げますが、真っ先に手を上げた子どもを当てると「エーと…」と詰まってしまう、何を答えたらいいか分からない、それが私たちの感情なのです。何か問題が起こると私たちの感情は即

座に手を上げます、私、答えを知っています、こうすればいいのですと、しかし、実際にその感情に答えさせると、それは私たちに正しい答えを与えていないのです。私たちは残念ながら、実際にこのように多くのときに感情に答えさせてしまっているのです。そこには平安に満ちた生涯は生まれてきません。そこから出てくるのは、不幸であり、悲しみ、恐れ、不安、様々な神に喜ばれない思いです。だから、パウロはここで命じるのです、「考えなさい」と。

いったいパウロは私たちに何を命じているのでしょうか？そのことを私たちはよく考えなければいけません。パウロはここで「**心を留めなさい。**」と言っていますが、それはどのような意味があるのでしょうか？このことばを直訳すると、考え、考慮する、熟慮する、評価する、時には計算すると訳されることばです。これは、私たちが何となく考えるというのではなく、一生懸命その物事に集中してそれを熟慮することを求めている、そのようなことばです。論理的に起こった事柄を考えること、それを処理すること、それがどのようなことなのかを正しく評価することです。パウロは「よく考えなさい、評価しなさい」と言うのです。そして、これは継続を表わす動詞の形が使われています。だから、考え続けなさいと言うのです。継続的に思い続けていなければいけないと。

では、パウロはなぜ、このように「考えなさい、評価しなさい」と言うのでしょうか？簡単に言うなら、私たちがどのように考えるのかということが、私たちがどのように生きるのかを決定づけるからです。私たちがどう物事を捉え、それに評価を下すのかということが、私たちがどのように生きるのかを決定づけるのです。箴言23：7を引用しますが、文語体がより正確に訳しています。「そは、その心に思うごとく、その人となりもまた、しかればなり。」、あなたが心に思っているのと同じように、あなたの人としての特徴や行ないもまたそのようになって行く、というのです。つまり、どう考えるのか、その心に思っていることがあなた自身を作って行くことと箴言は言うのです。私たちは私たちの生涯でその心にある思い、考えがどれほど重要であるかを理解しておかなければいけません。私たちが神の前にクリスチャンとして正しい人生を歩もうと思うなら、私たちはこの思いを支配しなければいけないのです。正しい思いをもって行かなければいけないのです。私たちにそれができなければ、聖書的に物事を捉え考えることができなければ、私たちはキリストのもとにやって来ることさえできなかったのです。パウロはローマ人への手紙1章で、私たちが神を知らないと言うがゆえに陥っていったサイクルを記しています。その中で神は、私たちが神を知らないと心を頑なにすることがゆえに、私たちに自由にしなさいとさせたのですが、そのうちの一つ、1：28に「**また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。**」とあります。これが私たち人間だったのです。私たちは生まれながらに良くない思いをもって生きていたのです。それゆえ、救われた私たちに対して、パウロは同じローマ12：2で教えています。「**この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。**」、この「心」は「思い」と全く同じギリシャ語が使われています。パウロは言います。私たちは救われる前は良くない思いに満たされた人物だった、それゆえに様々な悪を行ない続けていた、だから、救われたあなたは今、その思いを一新しなさいと言うのです。この世の人たちと同じように良くない思いに支配されて生きるのではなくて、思いを一新して正しい考えで生きなさいと言うのです。私たちは古い考えを捨て去って、私たちの思いをみことばの真理に沿わせて行く必要があるのです。私たちが靈的に成功して行くために、このように聖書的な思いをもつことが不可欠です。もし、それをしないなら、私たちの生涯は平安に満ちたものになって行くことはありません。パウロはローマ8：5-6でこのように言っています。「**肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。：6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。**」と、救いを得ていない人は肉的なものであり、肉的なこと、この世の事柄に思いを留めて行く、良くない思いに集中している、けれども、靈的な者、御霊に従う者たちは、御霊の事柄に思いを寄せる、そうすると、肉に思いを寄せる人には死が起こり、御霊による思いというのは、いのちと、今私たちがここで見ている平安を生み出すと言うのです。

残念ながら、私たちは聖書的に物事を考えることに慣れていません。多くの場合に私たちは聖書的に正しくない理解に基づいて、間違った結論を人生の中で為して行きます。今までもそして今も、肉的な考え方をしてしまうゆえに、様々な不安に苛まれ、平安のない人生を過ごしてしまうことがあります。イエスはそのことに関して、山上の説教の中でそれに近いことを言われています。ここでイエスは「思い煩うな」と同じ教えをされています。イエスはその話を聞いていた弟子たちに対して「**信仰の薄い人たち**」と嘆きのことば、責めのことばをされました。なぜそのように言われたのでしょうか。それは弟子たちが正しく自分の人生について考えることができなかつたからです。マタイ6章、25節のところからこの「思い煩う」ということについて話をして行くのですが、26節に「**空の鳥を見なさい。**」とあり、観察しなさい、よく見てご覧なさいと言われています。そして、そこから結論を導き出しなさいと話をし

ています。また、28節では「野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。」と言います。野のゆりをよく見てどうして育つのかよく考えなさい、考えなければいけないと。ところが、それができていなかった人々に対してイエスは言われたのです、30節「信仰の薄い人たち。」と。「ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。」とありますが、これは論理的に野の花や空の鳥を見たときに出てくる結論は何ですか？ということを行っているのです。それが分かっているがそれに信頼できないあなたは何と信仰の薄い者かと言うのです。考えが足りない。このことに関して、ロイド・ジョンズというイギリスの有名な先生が、非常にすばらしいことを語っています。少し長いのですが是非聞いていただきたいので読みます。「信仰の薄い人が様々なことに支配され打ちのめされたままになるのはどうしてか、この質問に対する答えはこうだ。すなわち、「薄い信仰」の真の問題点は、ある意味で考えようとしなないことにある。言い替えると、信仰というものに対する私たちの考え方全体が、正しくなければならないのだ。この箇所における主イエスの教えによれば、信仰とは本来考えることである。そして、信仰の薄い者の問題点はまさに考えないことである。彼は環境に打ち倒されるままになっている。この世の生活の真の難しさは実にここにある。この世の生活は手に棍棒を振りかざして私たちに襲い掛かり、頭を打ちのめす。こうして私たちは思考不能となり、無力と敗北に陥る。そこから逃れる道は、主によれば、考えることである。私たちはもっと時間を費やして観察と推論に関する主の教訓を学ぶように努めなければならない。聖書は論理に満ちている。私たちは信仰とは何か、神秘的なものだと勝手に思い込んではいけません。肘掛け椅子に座り込んで不思議なことが起こるのをただ待っているではない。キリスト教信仰はそういうものではない。キリスト教信仰とは本来考えることである。空の鳥を見て鳥のことを考えよ、そして、そこから論理的結論を引き出せ。野の草を見よ、野の花を見よ、それらのものを考えてみよ。ところが大部分の人々の誤りは考えようとしなないことである。考えようとする代わりに、座り込んだままで、私に何が起こるのだろう、私に何ができるのだろうと聞いている。これは思考の欠如である。降伏であり敗北である。主イエスはここで考えよ、キリスト者らしい考え方で考えよと迫っている。思考こそまさに信仰の本質である。信仰とはご希望なら次のように定義することもできる。信仰の人とはすべてのことが知的な意味において自分を殴り倒し、打ちのめさないではおかないように見えるときでさえ、それでもなお、考えようと頑張る人のことである。信仰の薄い人の問題点は自分の思考力を自分で統率しないで、他の何ものかによって、自分の思考力を統率されているところであって、いわば堂々巡りをしているのである。これが思い煩いの本質である。あなたが思い煩いのゆえに夜何時間も眠れなかった場合、その間、あなたが何をしていたか、私は当てることができる。あなたは堂々巡りをしていたのだ。あなたは誰かの、あるいは何かのことに関する、いつもと同じあの古い出来事の細部を念入りにほじくり返す。しかし、それは考えることではない。思考の欠如である。考えていないことである。」、どうでしょう？私たちは考えないことが多すぎるのです。いや、私たちは考えていると言うのですが、その考えは今まで私たちがもっていた良くない思いによって導かれている考え方であり、聖書的な考え方でないことがたくさんあるのです。まして、私たちは問題が起こったときに誰に一番最初に解答させるのか、一番最初に手をあげる感情に解答させるのです。私たちが想像する、思いつく最も早くに解決を与えてくれるところへと一生懸命走って行くのです。詩篇の著者たちはよく言います。神は砦ですとか、神は私の岩ですと、守ってくれる、そこに行けば大丈夫だと言うのですが、私たちはそれを知っていると言いながら、いや、この問題はここに洞穴を掘った方が安全だからそうしますと、神のところへは行かないのです。だから、私たちは不安であり平安に満たされないのです。考え方が間違っているのです。私たちが聖書的に考えるために必要なことはキリストのように考えることです。キリストが求めていることに即して考えることです。私たちに心の一変が必要なのです。私たちが神が考えていることに沿って、それに倣って考えることを学んで行かないといけないのです。

だから、パウロはコロサイ人への手紙3：2で「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と言います。また、Ⅱコリント10：5では「私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、」と言い、この「はかりごと」ということば、これもまた同じことばです。私たちの考え、思いのことを指しているのです。私たちは問題に直面して様々な対応をします。いろいろな感情的な思いが湧き上がってきます。今までの肉体的な思いが私たちに支配しようとしています。そのとき、パウロは言います、あなたの思いを服従させなさい、とりこにしなさいと、そして、キリストが考えているように考えなさいと言うのです。

私たちが様々な物事を決断するとき、私たちの感情や常識といわれる事柄が私たちの思考を支配して行きます。けれども、私たちは考えなければいけません。何が聖書的に正しいことなのかを…。そこから評価をしなければいけないのです。なぜ、考えることが必要なのかお分かりでしょうか？正しく考えることを学ばなければなりません。みことばに基づいて考えることによってその人の人生の礎が作り

出されて行くのです。

では、いったい具体的に何を考えるべきなのでしょう？「心を留めなさい。」とパウロは言いました。

「そのようなことに」と言って、パウロは私たちがどのようなことに心を留めるべきなのかを教えてください。私たちが何を考えなければいけないのか、簡単に見て行きましょう。

(1) すべての真実なこと＝真実の基準は神にしかありません。イエスは言われました、あなたのみことばは真実ですと。パウロはローマ3：4で「たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。」と言いました。また、詩篇の著者は31：5「私のたましいを御手にゆだねます。真実の神、主よ。あなたは私を贖い出してくださいました。」と、神こそが真理の神、まことの神であると言い、また、119：151「しかし、主よ。あなたは私に近くおられます。あなたの仰せはことごとくまことです。」と、あなたの命令こそが真理であると言いました。それゆえに、私たちはこのみことばに思いを寄せて行かなければいけないのです。だから、聖書的な考えをもっていないといけないのです。残念ながら、私たちはいろいろなときに間違った事柄に思いを寄せて行きます。それによって判断しようとしします。私の周りには何も良いことが起こりません、何一つ良いことなどありません、と私たちはよく言ったり聞いたりしますが、ほんとにそうでしょうか？どんなに悪いことが続くときでも一つぐらい良いことはあるはずですよ。いのちがあります。神を賛美して生きることができる将来があります。雨の予報だったのに神は良い天気をくれました。食事もあります。良いことはあるのです。それなのに、何一つ良いことはありませんと私たちは言うのです。夫婦の間でも、ときにこのように言うかもしれません。「あの人は私の言うことを一つも聞いてくれません」と。そんなことはないでしょう。正しくものを考えないと、もし何一つ良いことがないと思うなら、私たちの態度、心の状態はどんどん悪くなります。そこには希望がないからです。全く良いことがない中で希望を持つことはできません。でも、私たちがみことばに沿って正しく考えるときに、すべてのことは神に支配されて正しい最善のことが行なわれていると分かっているから、これは確かに辛くしんどいことだけれど、そこには最善があると分かるはずですよ。正しいことに思いを寄せる、私たちはそれをしなければいけません。私たちには真理の基準はありません。私たちの体験や感情は私たちに何が正しいのかを教えません。そう感じるかもしれません。それが最善だと思えるかもしれません。あのようなひどいことをされたのだから、仕返しをしても当然だ、もう二度と口を利かなくても当然だと思えるかもしれません。それはあなたが勝手に決めた真理であって、神の真理ではないのです。私たちはみことばに沿って物事を考えないといけないのです。

(2) すべての誉れあること＝誉れあることとはおののきを起こさせることを表現することばです。ありとあらゆる雄大であり、きよく、尊敬の念を抱かせる、崇拜したいと思わせる、そのような態度を起こさせる、そのような事柄に思いを寄せなさいと言います。パウロはこの同じことばを牧会書簡の中で使っており、執事や女性執事の特徴を表わすことに使っています。彼らが非常に高潔な尊敬に値する特徴をもっているとそのことを表わしています。私たちは、人々の前で尊敬に値すること、尊ばれること、人々がそれを見てすばらしいと思うような、そのような事柄に目を向けて行かなければいけないのです。人々が尊敬を失うような事柄に目を向けていってはいけないのです。そこに思いを留めてはいけません。

(3) すべての正しいこと＝この正しいということばは「義」です。神が正しいとする基準に沿って考えなさいということばです。その方向で物事を考えなければいけないのです。みことばは何が正しいのかその義を教えます。ですから、私たちはみことばを知らなければ、その義に沿って考えることができないのです。正しく物事を考えることができる人の上には正しい義なる生涯が生まれてきます。不正を働こうと思っただけではいけないのです。どのような状況の中でも…。神の特徴に沿った思いを持つことです。

(4) すべてのきよいこと＝これは道徳的な純潔、いっさい悪に汚されていない心、態度を指します。人生のあらゆる分野において汚れを身に付けることができないような、そのようなことです。私たちが思いを寄せないといけないのはきよさです。心の中に平安がない人の中には、私たちが毒々しいとか、苦々しいということばで説明するような心の態度をもった人が多くいます。なぜ平安が生まれないのか、きよいことがないからです。きよいことを思わないからです。人を妬んでしまったり、人からの仕打ちにどうして報いようかと考える、これらはきよいことではありません。

(5) すべての愛すべきこと＝これと次の「すべての評判の良いこと」は新約聖書ではこの箇所には使われていません。非常に広い意味で使われることばです。実際にギリシャの社会ではよく使われていたようです。愛すべきこととは、あらゆる、それはすばらしい、私もしたいと思うそのようなことです。心引かれること、善意の行為、ボランティア活動をされる人に対してその行為はすばらしいですね、と言います、そのようなことです。私たちの周りには主の美しさに、主が求めているすばらしい事柄に目を留めて、そこに思いを寄せてそれに基づいて行動を取って行くべきです。

(6) すべての評判の良いこと＝あらゆる、人々がそれはすばらしいと言います。不安を抱えたり

問題を持っている人は、不平をこぼします。つぶやきます。皆さんがだれかにつぶやかれたとします。そのときそれは何とすばらしいとは絶対に言いません。けれども、私たちが問題を抱えているときは問題にばかり目が行き、ぶつぶつつぶやき続けます。明らかに、評判の良いことに思いを寄せていません。それに基づいて考えていないのです。私たちは人々が見てこれは何とすばらしいということを考えなければいけないのです。

(7) 徳と言われること＝道徳的にすばらしいことを指します。

(8) 称賛に値すること＝賛美を受けるにふさわしいという意味があります。

神の前にあって正しいこと、あらゆる良いこと、評判の良いこと、愛すべきことというのは、神の前に道徳的にきよく正しいことであり、それらは神に称賛を受けさせるようなことであると、これらをもってパウロは何に思いを寄せないといけないのかをまとめたのです。それを一言で表わすなら、「あなたはキリストのようになりなさい、キリストが考えたように考えなさい」です。キリストこそ真理です、キリストこそ誉れある方、キリストは正しくてきよい方、彼が為したことは愛すべきことだったし、評判の良いことだったのです。そこには道徳的にすばらしいことがなされ、人々は彼のわざを通して、神を賛美したのです。パウロは言います。キリストに似たように考えなさいと。それが実際にこの文脈の中での流れでした。最初に見ました。3章でパウロは言いました。私が目標としているところはキリストの復活のからだにあずかることだと。だから、それに向かって一生懸命生きている、そのために、私たちはキリストのようには考えないといけないのです。キリストが生きたように生きなければいけないのです。そして、それは私たちがどのように物事を捉えるか、聖書的にものを考えるところから始まって行くのです。パウロはIコリント2：16でこのように教えています。「**いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。**」と、私たちはもうすでにキリストの思いを持っているのです。救われたときに私たちは新しい思いへと心が入れ替えられたのです。それゆえに、私たちはキリストに沿って聖書的にものを考えることが可能なのです。できないとは言えないのです。それをしないのは私たちが古い思いに捉われているからです。みことばに沿って正しく物事を理解しようとしなからず。

いったいどのように私たちが平安に満たされてこの生涯を生きることができるのか、パウロは言いました。条件を満たさなければいけないし、与えられた平安を継続的に持つて行くには、私たちは考えることから始めなければいけないと。聖書は私たちにこの考えを実践した人の例を挙げています。ダニエル書3章に出て来ます。ダニエルと3人の友人たちはネブカデネザル王から偶像礼拝を迫られます。それをしなければ燃える炉の中に投げ込むと、死刑です。その状況の中で、確かにそれは困難なことですが、彼らは嘆くことなく、その通りにしてください、神のみこころなら神はその中から救い出してくれる、もしそうでなくても大丈夫です、神が求めていることは偶像礼拝をして生きることよりも、主に従順に従って天に召されて行くことですよと。3：17-18「**もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。：18**しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」、彼らは聖書の真理に即して考えたのです。死刑という問題が迫っている中で、彼らには選択がありました、妥協することと妥協しないこと。彼らは聖書の真理に即して考えようとなりました。神は偉大な方だからたとえ不可能と思えるようなことであっても、それを為すことができる、だから、私はあなたに信頼してその考えに即して行動しますと、彼らはそのようにしたのです。問題は私たちです。私たちも彼らと同じ真理をこのみことばに持っているのです。これが私たちの生活の原則です。それに基づいて私たちは生きるのでしょうか？それを考えて物事を捉えるのでしょうか？

願わくば、私たちがその考える方法を学び続けることによって、みことばに沿った聖書的な考えを持つことによって、人生の様々な荒波の中で揺るがされることなく、平安に満ちた生涯を送りたいものです。パウロは言います、あなたにはできると。なぜなら、あなたにはキリストの心があるからと。